



MINATO-TOKYO

みなとユネスコ 会報

Bulletin

MINATO UNESCO ASSOCIATION NEWS & CALENDAR

ISSUED BY/MINATO UNESCO ASSN. 16-3, SHIMBASHI 3-CHOME MINATO-KU TOKYO 105-0004/HIROSHI NAGANO PRES.
 発行所/港ユネスコ協会 〒105-0004 東京都港区新橋3-16-3 Tel: 03-3434-2300 Fax: 03-3434-2233 発行人/永野博
 Mail: info@minatounesco.jp http://minato-unesco.jp

2018年6月1日発行 第152号

目次	
P1 巻頭言：私の旅のスタイル	P6-7 ドイツ大使館訪問
P2-3 国際理解講座「三途の川の渡り方」	P8 ルーマニア料理
P4 ディプロマツツ・レクチャー	P9 都ユ連研修会
P5 MUA 総会	P10 事務局便り/編集後記

私の旅のスタイル「温泉と神社めぐり」

港ユネスコ協会 副会長 平方一代



私の2018年は、清々しい空気に満ちた伊勢神宮の御垣内参拝（正式参拝）をすることから、始まりました。神官に先導され、玉砂利を踏みしめ、御垣の内側でする参拝には、新年早々、身が引き締まりました。

旅行が趣味の私は、今まで数多くの国内旅行をしてまいりましたが、近頃は、思い立ったらすぐ出かける、プチ旅行が楽しみの一つです。朝起きて天気が良い時、車で1時間から2時間で行ける距離の、温泉や神社を探します。とはいっても、たいていは箱根か熱海。箱根の場合、まずは箱根神社に参拝し、近場の温泉に入ります。熱海の場合は、最初に必ず、来宮神社にお詣り。参拝の後は海の幸を食べ、温泉に浸かるのが定番です。

国内の旅では必ず温泉に行く私ですが、実は海外に行く際にも、温泉が近くにあれば、必ず寄るようにしています。初めての海外旅行はパリとブタペストでしたが、その際、ブタペストの有名なセーチェニ温泉に行ったのを皮切りに、歴代のローマ法皇がつかったと言われる、ローマ郊外のテルメ・ディ・パーピ、同じくイタリアのメラーノ温泉では、巨大なリゾートプールのような温泉につかりながら雄大なアルプスを眺める、またとない経験をする事が出来ました。

また、温泉とは違いますが、フランスのルルドでした沐浴は、たいへん思い出深いものでした。ルルドは奇跡が起こる聖地と言われており、湧き出る泉の水は万病に効くと、世界中から人々が訪れる場所です。私も奇跡にあやかればと、泉の水を満たした浴槽にひたる沐浴をしたのですが、なるほど、その後体調が良くなったような気がしました。

私は温泉目当てですが、旅の目的は人それぞれです。私もまだまだ、日本の温泉地はもとより、台湾やアイスランド、アメリカなど、世界中の温泉を訪ねる旅を続けて行きたいと思っています。旅先で受けた親切は何時迄も心に残ります。来日外国人へのおもてなしが世界平和への道に繋がる事を祈ります。

三途の川の渡り方

笑顔の意味について

日時：2018年2月27日（火）

会場：港区立生涯学習センター

今回は講師に医師の中島宏昭（なかじまひろあき）氏をお迎えして、掲題の大変興味深いご講話を頂戴しました。まず、簡単に講師のプロフィールを紹介させていただきます：

昭和大学医学部卒業

1986年から1988年米国留学（Mayo Clinic 免疫・アレルギー部）

2000年度 昭和大学横浜市北部病院呼吸器センター長 教授・副院長

2012年から世田谷保センター所長（現在まで）

2016年からモンゴル国保健省の要請で JICA の短期専門家として医学教育支援プロジェクトに参加

永野 MUA 会長の挨拶に続き、中島先生のご講演は「三途の川を渡ったことはありますか？」の問いかけから始まりました。臨死体験をされた患者さん達の話は皆似通っているようで、それを元にお話されました。

講演要約：

あちらの世界とこちらの世界の間にある川を、日本では三途の川という。民間信仰では、亡くなってから7日目に渡ると言われている。川の手前に奪衣婆・慧衣婆という2鬼がいて衣をはぎ取る。渡し船の渡し賃は六文銭だが現在は紙にコピーしている。（本当のお金は重いので船が沈むため）

体験談によると、あちらでは自分より先に亡くなった人で会いたいと思っていた人が待っている。あちらの世界は温かい色合いで、お花畑があり川のせせらぎが聞こえる。そこで「まだ来てはいけない」と言われたので現生に戻ってきた。



エリコ・ロウ著「死んだ後には続きがあるのか」（扶桑社）より抜粋：

①生から死への移行はあっけない、②体の外から自分が見える、③自分が死んでしまったことに気づく、④トンネルを抜けて眩しい光の世界、⑤故人との再会、⑥神々しい光の存在と対面する、⑦人生の回顧と反省、⑧夢と異なりいつまでもはっきり覚えている。

あちらの世界で出会った人々の共通点は、皆優しくかった。決して私を非難しなかった。講師は多くの患者さんを見送ったが、満足して逝った方やそうでなかったと思われる方もいた。人は亡くなる時、顔の全ての筋肉（表情筋）の力が抜けるので柔和な顔になる。まるで笑っているような表情になるので見送る人たちは慰められ安心する。その顔は仏様や弥勒菩薩のようなお顔になる。

スクリーンにアメリカ留学時代の仲間やご家族との笑顔一杯の写真が写された。（笑顔で撮ることになっている）一方、モンゴルの病院のメンバーの表情は緊張しているせいか笑顔が少ない。本日の副題は「笑顔の意味について」

留学されたのは、ミネソタ州の田舎で、治安も良く人々も親切だった。病院名は Mayo Clinic（メイヨー・クリニック：19世紀の半ばにメイヨーという医師が竜巻で負傷した人々の為にクリニックとして開いた。現在は2,000床を超える巨大病院であるが名前は変わっていない）で30年前のこと。当時1年間で540億円の寄付金が集まった。寄付金の7割は人件費に使わなければいけないという州法があるため、潤沢に人がいて、対人サービスをしている。病院も研究室もとにかく人に優しい雰囲気、留学当時言葉がよく通じないときでも安心していられた。病院の外来棟は十字型に建てら

れているので何処からも光が入り、患者の顔色がよくわかる。半日で1人の医師が6名ほどの患者を診察するので1人に40分は掛けられる。ゆっくり話を聞いて頂ける。日本は病院の数は多いのに医師の数が少ないので患者の話を十分に聞く余裕がない。

モンゴルは雨が少なく乾燥しているため、草原といっても草が少ない。このため牧畜の餌が不足するので家畜と共に移動している（遊牧）。鶏や豚は移動が大変なので連れて歩けない。従って高価な食材である。生活は天幕を張ったゲルで、入り口は一か所、全て南に面している。父親は南から入り奥の北側に座り、南にある入り口を警戒しながら家族の安全を見守る。過去の歴史で、常に脅かされた中国の位置がモンゴルの南にあるので常に南を警戒している。韓国は多くの資本を持って入ってくるが、モンゴルで得た収益の殆どを自国に持ち帰るのであまり好感を持たれていない。日本に対しては、親日的だが、「日本は物やお金は贈ってくれるが、人を送ってこない」ということで人的支援を希望する声が強い。日本は農耕民族なので、他の家族と助け合って生活するから挨拶が必要であるが、モンゴルは遊牧民族で家族だけで遊牧生活をするため他の家族とはあまり挨拶しない。日本人に対しても初めはしないが親しくなると笑うようになる。



医師は患者の余命を予測できるか？予測できない。人は心の持ち方で寿命が変わるので予測できない。講師の場合、病名について本人が知りたい場合、がんであるという事実を本人に伝え、治療法の説明をする。余命の告知については「分からない」と言う。何故なら、今からどういう気持ちで生きるかで余命が変わる可能性が大きいからである。永年患者さんを看取って思うことは、「あちらには良い世界がある」ということである。「一生懸命生きてると、その人にとって一番いい時にあちらの世界が迎えに来てくれる」と考えるようになった。

NK（Natural Killer：抗体を作らずにがん細胞を殺すことができる）細胞が働くとがん細胞を殺したり、弱めたりすることが出来る。

NK細胞はどんな時強くなるか：

① 感動した時、②楽しいと思ったとき、③大いに笑ったとき、④感謝したい気持ちで一杯になったとき。

人間が大切にしてきたもの：

誠実、公平、勇気、明朗、謙虚、献身、叡智、優しさ、笑顔。

人生の目的：

- ① 自分の中に潜在する能力を出来るだけ引き出す
- ② 意識して他の人と好ましい人間関係を作る
- ③ 他の人の人生に意味のある貢献をする

参加者との質疑応答

1. 歳をとってから病気にならないためには、どうしたらよいですか？

先生：意欲をもって生活し、適度な運動とバランスの良い食事をとり、くよくよしないこと。

2. 人は物事に対する意識の差はあるか？知っているのに知らないふりで生活するのはつらいが？

先生：全て宇宙の意志に任せる。良いことも悪いこともとらわれないで全て流す。人や物事を見る時に偏った見方をしない。

3. 病気を背負っていくにはどうしたらよいのか？

(P.9 へつづく)

2017 年度 第 35 回ディプロマツツ・レクチャー

日時：2018 年 2 月 9 日（金曜日）午後 3 時から 4 時半

会場：国際文化会館 ルーム 4

講演タイトル：*Health Crisis on the Globe and Japanese Style Health Crisis Management*

講師：林健太郎氏



「ディプロマツツ・レクチャー」は年 1 回、在日各国大使館および大使館員を対象に、日本事情をより深くご理解いただくことを目的として、英語で講演をして頂く、港ユネスコ協会創設後間もなくから継続している大きな事業である。今回は大使館から、大使 1 名を含む 16 名が参加して下さった。永野 MUA 会長の挨拶、講師紹介から始まりました。

講師の林健太郎氏は琉球大学医学部医学科卒業後、国境なき医師団での活動や Barefoot Doctors Group 設立など人道支援に従事する一方、国立保健医療科学院や千葉大学法経学部、琉球大学医学部保健学科グローバル保健学科の客員研究員を務める等、多彩な活動に参加しておられる。現在は（社）八角平和計画研究所の理事長として、またミャンマー政府登録 NGO Barefoot Doctors Myanmar 事務局長として、日本とミャンマーの間を忙しく駆け回っておられる。



まず冒頭に、林氏の活動を紹介する動画が約 20 分流れ、ミャンマーで八角の栽培に挑む様子が紹介された。講演においては世界の健康危機として、気候変動に伴う天災の増加、グローバル化に起因するテロ・感染症・薬物依存・生活習慣病の蔓延などが挙げられ、SDGs（Sustainable Development Goals）（持続可能な開発目標）達成に向けた努力が必要と力説された。日本の優れた医薬品や医療システムをアジアに、中東に、アフリカにと世界展開するための協力体制を築こうと、林氏が健闘なさっていることもよく分かった。

林氏は講演後も、すぐミャンマーに向かう予定のため、急いで会場を後にされた。かの地で八角が順調に成長していくよう、また林氏がお元気で活躍を続けられますよう、心からお祈りしている。

（副会長 宮下ゆかり）

2018 年度 MUA 総会

日時：2018 年 4 月 26 日（木） 18:30～20:00

場所：港区立生涯学習センター 3 階 305 号室

港ユネスコ協会の総会が 4 月 26 日（木）午後 6 時 30 分から、港区立生涯学習センター305 号室において開催されました。武井雅昭港区長が、過密なスケジュールの中をぬって、開始直後からご列席くださいました。

武井雅昭区長ご挨拶

「港区は昭和 22 年（1947 年）の誕生以来暮らしやすい、誰もが認めあえる環境作りを目指してきています。区内の人口は近々256 千人と過去最高を更新し、その中で外国人比率はほぼ一定して 8%となっています。つまり外国人人口も増えているわけですが、外国人の方が安心して過ごせるような、港区ならではの豊かな地域社会を作り上げていくために、区の国際化をさらに進めていく必要があります。国際化推進の点では港ユネスコ協会には従来にも増してお力添えを頂けますようお願いします。」



永野博会長挨拶



「当協会では昨年度いくつかの新たな試みに挑戦しましたが、その一つとして第一回日本語スピーチコンテストを開催しました。平方副会長の獅子奮迅のご努力もあって盛会のうちに終了できました。今後の PR ツールとしても活用できる報告書を別途作成します。また、菊地副会長の肝いりで歴史ある愛宕の青松寺の大きなご協力を得て、坐禅体験講座を実施することができました。

一方、若い世代の取り込みが課題ですが、これは他のユネスコ協会にも共通した課題となっています。そんな中で三田高校ユネスコ委員会の生徒たちをこれまで通り受け入れて戦争経験者に実体験について清水軍治会員に話をしてもらい、ユネスコスクールに新たに認定された六本木高校で日ユの名代として記念プレートを贈呈し、更には東京海洋大学と水を通した ESD の啓蒙・推進活動での協力可能性の検討を始めました。新年度に入ってからではありますが、慶應義塾大学ユネスコ・クラブが協力団体会員となってくれたので、若い世代を中心とした事業を具体的にどのように展開していくかを近々話し合うことにしています。

また、財政面での自立性の確立が急がれますが、この点にも変わらぬ努力を注いで行きます。因みに、昨年度は会計上の赤字は 75,000 円でしたが、各種寄付等の効果もあって実質的には 5,000 円の赤字に改善されています。」

議事内容：2017 年度の事業報告と決算報告が承認され、次いで、2018 年度の事業計画案、事業予算案が承認された。また、役員人事では、慶應義塾の清家篤塾長の後任となられた長谷山彰氏並びに昨年他界された東京芸術学園音響芸術専門学校の見上良也理事長の後任者である見上陽一郎氏が、新たに当協会の顧問に就任されることが報告され承認された。

全ての議事終了後、永野会長からこの 4 月末日をもって退任する須田事務局長から井上順一事務局長に交代することが紹介された。

港区教育委員会からは、生涯学習スポーツ振興課の課長に新たに就任された木下典子氏に加えて、庄司健二係長並びに新たに港ユネスコ協会担当となられた穀山杉郎氏が出席くださいました。最後までご参加下さった穀山氏から、「教育委員会として港ユネスコ協会の活動をしっかりサポートしていきたい」とのご挨拶を頂き総会が終了しました。

（報告 事務局）

ドイツ連邦共和国大使館訪問

日時：2018年3月8日（木）午前10時30分
場所：港区南麻布4丁目

広尾駅近くの有栖川宮記念公園を隣に閑静な佇まいの中、南部坂にあるドイツ大使館を訪問。広報担当の須藤恒平さんの歓迎を受け、会員14名とともにモダンな建物の中の人となりました。四層にわたる吹き抜けのグランドフロアは、欧州連合旗（EU旗）とともにドイツ連邦共和国国旗が飾られ、見上げるとそれぞれのフロアにはアシンメトリーの開口部をもつ回廊があり、シンプルな美しさを感じました。

1861年からの国交で、横浜からいくつかの地を経由して今日南麻布に館を構え、2011年に日独交流150周年の行事を行った。その年は東北大震災と重なりより一層の深い絆で日本を応援していただいたことの詳細なお話には改めて御礼申し上げた。因みに事務所棟は、2005年の改築時に首相官邸に次ぐ強度な耐震構造になっているとのこと。等のお話を須藤さんから伺いながら館内を一巡。

続いてレセプションルームでの質疑の時間。須藤さんの進行でまずは参加の皆さんの「ドイツと私」で自己紹介。お話の中で、日本で初めて作られた「バウムクーヘン」は“カール・ユーハイム”が広島で焼いたのが始まり。今年は、「第九」が演奏されて100周年の年。徳島県にある板東俘虜収容所での「ベートーベン交響曲第九番」が日本初演／アジア初演。などの話にもおよび、長い歴史のつながりを認識しました。

公使・広報文化担当のローベルト・フォン・リムシャさんに会員からの質問に丁寧にお答えいただきました。通訳は文化担当のホーボルト幸夫さん、同席で広報担当の國分 薫さん。

★ベルリンの壁崩壊後の今日は？・・・今日は都市と地方とで格差が生じている。ひとえに都市部への人口集中によるものであり、東と西の違いは見られない。この28年間、投資が「インフラ」に向けられその先が「東」に多かったことで、東の発展が多くみられることは事実。「復興税」は全国の労働者が払っている。今日は「地方の活性化」が課題。こどもの数、そして医者などの数などで対策を練っている。

★南北の格差は？・・・これも大都市と地方から生じていることで、決して「南北」の問題ではない。歴史的に見て、中世時代から北部は商業町としての裕福さ、産業革命後、西部が力をつけて裕福に、南のバイエルンは、1950年までは農業、その後ハイテクでお金持ちの州になっている・・・というように、長い歴史の中で各所にいろんな産業が成り立っている。ここでもやはり「都市と地方の格差」が課題。

★女性の社会進出について・・・今日3月8日は「国際女性デー」。タイムリーな質問ですね！日本でも政界、大臣、そして東京、横浜の首長で活躍している。2国を政界への女性比率で比較すると「日本は9%、ドイツは36%」、近い将来50%に近づく。アーティスト、大学教授などをみて、確かにドイツの女性人数は多いが、両国の共通点として企業の社長、COOの女性は少ない。

★税金 年金制度について・・・「次世代の為に支払システム」は、日本と同じだが、このところの高齢社会に直面して、払う側より受け取る世代が増えていることの課題がある。年金全体の中で「公的年金」の構成比が下がってきている。もうひとつの「企業年金」（個々の企業独自の年金）、そして「私的年金」（毎月積立貯金することによる「年金」。「減税」で対応をしている。）などを足して全体の「年金」が構成されている。今のドイツの老人は良い生活をしていると思うが、近い将来での「不安を除去する」方法を構築しているところだ。

★海外からの労働力について・・・ドイツの失業率は低い。「仕事」というより「住む場所（廉価な住宅）」確保の競争があるのみで、移民による就業リスクは無いと言える。一方、日本で生まれる赤ちゃんの14人に一人は、純日本人ではない。現在、日本にはベトナムから含めアジアの国々から学生、労働者の移住が増大。多様性という変化がみられる。近い将来の日本もドイツと同じように混合の人種構成になるだろう。

★労働時間について・・・一般的に、OECDは1393時間、日本は1800時間。効率の面を見ると更にドイツの方が20%も効率よい。「効率よく、速く、短く・・・家に待つ家族の為に労働時間

の削減を！」が公使の結びのお言葉でした！以上で予定の時間を大幅にオーバーして公使ローベルト・フォン・リムシャさんの質疑を終了。

続いて、ホーボルト幸夫さんの補足説明の時間をいただきました。

◎両国の、有給日数、取得日数、就業時間と退出時刻の比較で、ドイツのある機関の調査によると、ドイツ人は、一年間、26日から30日の有給取得している（公的な有給休暇は20日間だが）。そして、11日から15日の連続有給休を5割の人が取得している。

ドイツは、一週間40時間の労働時間・フレックスタイムを利用して「金曜日は、午後4時には94%が帰宅している」自宅での“赤ワイン”を飲むことが仕事を終えた証し。その時に発する“ファイアー・アーベント”というドイツ独特の掛け声がある・夕方を祝う・仕事を終えたことを祝う・フリータイムを祝う・家に帰って友達を呼んで赤ワインを飲む！！風邪をひいたら「有給」でなく「別扱い」で休暇を取る・決して遊んでいるのではないという解釈。

州によって異なるが、祝日、土日の休みの合計数は、日本の「休み」の方が多い。しかし有給、次年度繰越システムなどで、ドイツの労働時間は少ない。休み時の仕事の引継ぎシステムが出来上がっている。

◎男性の育児休養・・・少子高齢化の中、多くの子供をつくる・・・子供を産みやすい環境づくり・・・が課題と認識されて、2000年に「育児休業法」を改正。「親時間」の設定で男性の育児休業を取得できやすいようにした。産前産後の家族の環境の改善に繋がってきている。

<むすび> 日本の良い所を生かし、習うところは習う。少子高齢化を克服し、子供を産みやすい環境づくりを構築、「年金」体系を再構築、そして都市と地方の格差をなくしていく等、両国の共通の課題事項が浮かび上がってきました。公使のポイントをついた貴重なお話は、豊かな国づくりの数多くのヒントがあふれていて、その解決の為に施策を国を挙げて練っておられていることを感じました。会員一同、有意義な大使館訪問を終え、「ベルリン・ベア」の見送りを受け南部坂を後にしました。

私自身、帰宅しての夕刻、早速“ファイアー・アーベント”を実践。お土産の日本橋浜町にあるドイツパンのお店「タンネ」のプレッツェルを美味しく頂き、ドイツを紹介する諸資料、グッズに囲まれて「国際女性デー」を我が家なりに考え直す、有意義な一日となりました。

（常任理事 小林敬幸）



（左から國分薫さん、一人置いてホーボルト幸夫さん、一人置いて須藤恒平さん）

2018 年 世界の味文化紹介 ルーマニアの家庭料理

日時：2月24日（土）

場所：港区立男女平等参画センター「リーブラ」料理室

今回は講師にチェケアザ・シルヴィアさん（CERCHEAZA Silvia）（駐日ルーマニア大使秘書・広報文化担当）を、またアシスタントとして菅原梨沙（フード・コーディネーター）をお迎えして実施しました。簡単におふたりを紹介しますと、日本語が堪能なシルヴィアさんは母国ルーマニアで日本語を勉強され、その後国際交流基金のプログラムで日本に留学した後、ルーマニア大使秘書に就かれました。日本滞在歴は8年以上とのこと。一方、アシスタントの菅原さんはフード・コーディネーターとして様々な料理の紹介普及に活躍されています。



まずシルヴィアさんの流暢な日本語による母国ルーマニアの紹介から始まりました。人口は約2000万で、ウクライナ、モルドバ、ハンガリー、ブルガリア、セルビアそして黒海に接しています。またドナウ川が黒海に流れるところでもあります。国民はルーマニア語を話し、宗教はルーマニア正教が多いとのこと。料理はオーストリア、ハンガリーからの影響もあり、豊かな農業国でもあることから、美味しい食材を生かしたものが特徴です。

今回のメニューは以下の4品でした：（下の写真は左から①～④）

- ① オリーブとチーズの盛り合わせ：黒と緑のオリーブ・チーズやサラミを楊枝でさしたものを、トマトやキウリとともに皿にきれいに盛りつけます。
- ② チーズパン（Saleuri）：ベーキングパウダーを使うパンで、小麦粉にクリームチーズ、バター、ヨーグルトを混ぜて生地をつくります。麺棒で伸ばし、スティック状にカットしてオーブンで焼きます。
- ③ サラダデヴフェ（ポテトサラダ Salata bouef）：ポテトサラダにニンジン、ピクルス、炒めた薄切り牛肉、豆乳を混ぜます。盛りつけには赤・黄のパプリカ、ゆで卵、パセリで飾ります。
- ④ サラダデビネテ（Salata de vinete）：焼きナスにオリーブオイルをからめたもの。



写真のお皿はホRez陶器（シルビアさん持参） ルーマニアの世界遺産でもあるホRez修道院の近くで作られる陶器は古くその技術は代々伝わってきたもの。土を集め粘土をつくり、焼成までは男性がやり女性は絵付けをします。この技は2012年ユネスコ無形文化遺産『ホRez陶器の職人技』として登録されました。

いざ、参加者スタッフも含め30名が5台の調理台でにぎやかな実習風景となりました。アシスタント役の菅原さんがテキパキとすすめてくださいました。シルビアさんの美しい盛り付けもなかなかでした。美味しいハーブティはルーマニア音楽協会の方の差し入れでした。シルビアさん、菅原さん、参加された皆さま 楽しい料理ワークショップありがとうございました。（常任理事 松崎加寿子）

民間ユネスコ運動 70 周年記念 東京都ユネスコ連絡協議会研修会

日時：2018 年 2 月 11 日（日）14 時～19 時

会場：目黒区総合庁舎内 2 F 大会議室

港ユネスコ協会から 6 名参加、全体で青年会員を含め 83 名の参加。70 年の節目としての講演会、討論会、交流会と活発な意見交換の場となりました。

★ **開会の挨拶** 東京都ユネスコ連盟協議会会長 平井 憲太郎氏

★ **講演「世界の中のユネスコと課題」**

鈴木佑司氏（法政大学名誉教授、国連大学高等研究所客員教授、日本ユネスコ協会連盟 理事長）

世界は、激化するグローバリズムとナショナリズムの相克、そして日本国内では構造的な課題 - 少子高齢化、東京一極集中、内向き志向。こんな中、我々民間ユネスコは何をすべきか・・・まずは、足元から。どんな少子化が進んでも学校と家庭と地域社会の有機的なかわり方が大切。市民の国境を超えた平和のための連携・連帯することに価値を見出すこと。地域社会に根差した文化や伝統を若者世代に伝えることが大切。東京も地域のひとつ。地域の文化なしに地域社会の存続はありえないのではないのでしょうか。

★ **講演「種（たね）が危ない！」**

天笠啓祐氏（ジャーナリスト、市民バイオテクノロジー情報室代表）

生物多様性と食の安全を守るために、地域農業を発展させ、食文化の多様性を守る。そして GMO フリーな地域を広げ、日本の伝統的な品種を守り、有機農業を広げていくことが大切です。

★ その後、青年会員による「SDGS と私たちのユネスコ活動」報告。そして参加者全員が SDGS の 17 の内容を 5 項目に分かれて「グループ討論」とその発表。

（MUA 常任理事兼都ユ連理事 小林 敬幸）



これからの行事のお知らせ：

★ **第 74 回 日本ユネスコ運動 全国大会 in 函館**

テーマ「広げよう平和・共生の心 ～北の大地から次世代へ～」

日程：2018 年 7 月 7 日（土）～8 日（日）

会場：函館市芸術ホール

（既に参加申込み期限は過ぎています）

★ **2018 年度 関東ブロック・ユネスコ活動研究会 in 茨城**

日程：2018 年 9 月 8 日（土）～9 日（日）

会場：茨城県立県民文化センター小ホール

テーマ「つなげよう ともに語ろう ～持続可能な社会を実現するために～」

申込みは、港ユネスコ協会事務局まで（申込み期限は 7 月末）

（P.3 よりつづく）：国際理解講座「三途の川の渡り方」

先生：医師は知識と技能を学ぶが、患者さんの病気を背負うつらさに関する教育はあまり受けていない。患者さんから直接聞くことで患者さんの心を想像し、気持ちを察して治療法につなげる必要がある。難しいことではあるが。

（終わりに）

参加者のアンケート回答には、講師の優しい語り口と内容に心打たれ、生きる力を頂いたという感想が多かった。講師が経験されたアメリカとモンゴルでの話題も取り入れられ、笑顔が対照的だったのが興味深かった。

（副会長 奥村和子）

事務局便り

【ようこそ 新入会員】

個人会員：栗原千春さん、古寺公彦さん、篠田美玲さん、丹羽祐子さん、原田紀子さん、
前田幹博さん、北川未来さん、目黒重子さん、渡邊峰子さん、楊憶瑤さん

協力団体会員：慶應ユネスコクラブ 鄭さん、国際日本語学院 岡端和彦さん

【今後の事業予定】（詳細は別途、チラシやホームページでご案内します）

☆6月1日（金）13：30～16：30 ミンダナオ子ども図書館講演会

講師：松居友館長 会場：港区立生涯学習センター305号室

☆6月8日（金）18：30～20：30 第1回国際理解「危機のユネスコ世界遺産」シンポジウム

講師：五十嵐敬喜氏、佐藤弘弥氏、東郷和彦氏、永野博氏

会場：港区立生涯学習センター305号室

☆6月16日（土）13：30～16：00 ゆかた着付け体験教室

会場：港区立生涯学習センター203号室、定員：20名、参加費：500円

☆6月21日（木）18：30～20：30 新入会員を囲む会

会場：港区立生涯学習センター303号室・MUA事務局

☆6月25日（月）18：30～20：30 坐禅体験講座

会場：萬年山 青松寺、定員：40名、参加費：会員無料、非会員 500円

☆6月25日（月）、7月23日（月）、9月24日（月・祝）18：00～20：00 茶の湯入門講座

講師：小野宗恵先生（裏千家 専任講師）

会場：港区立生涯学習センター203号室、参加費：6,000円（3回分）

☆6月28日（月）15：00～16：30 ルーマニア大使館訪問

参加者：会員及びその家族、参加費：無料

【ご寄付、ご寄贈品など。ご協力ありがとうございました。】

（A）日本ユネスコ協会連盟の東日本大震災子ども支援募金 累積合計44,045円

★11月28日 国際シンポジウム（寄付） 306円

★2月27日 第二回国際理解講演会（寄付） 15,000円

★昨年度からの繰越金 7,985円

（B）日本ユネスコ協会連盟 書き損じはがきのご寄付 61枚（切手）

【ご協力のお願い】 常時受け付け中です。事務局までお願いいたします。

*日ユ協連・東日本大震災子ども支援募金

【事務局人事異動】 4月末で須田康司事務局長が退職され、5月から井上順一さんが後任に就かれました。

須田さん、長い間お世話になりました。井上さん、よろしくお願いいたします。

【編集後記】

- ・体制や価値観が大きく異なる複数の国家が、防衛など安全保障を含めた政治・外交交渉により、大きな成果を導き出すには、全体の勢力均衡（パワー・バランス）を鑑み、主要な関係国間の駆け引きを乗り越え、相当の忍耐力や粘り強さなどが求められることだろう。（前田幹博）
- ・先日、ある小中高一貫校に行った。今や英語は小学校から。私たちの時代に比べ、英語を学ぶ環境は充実している。これからの子どもは英語が話せることが当たり前になるのか。羨ましい。（小林真弓）
- ・過日、1936年のベルリン五輪で史上初の4冠を達成したアメリカの黒人陸上競技選手ジェシー・オーエンスの半生を描いた伝記映画を観た。原題「Race」が意味する競争と人種をからませて人間を考えさせる秀作であった。（棚橋征一）

港ユネスコ協会事務局 （火～金 10:30～17:00）

〒105-0004 東京都港区新橋 3-16-3 TEL 03(3434)2300 TEL・FAX 03(3434)2233

Eメール：info@minatounesco.jp

ウェブサイト：<http://minato-unesco.jp>